

では貴様も俺も同じ日本人だと言うことで殴り合いが度々あったため、内地上陸までは襟章は外さぬことにしていた。

中国で使用した金銭は百円に対して日本円は十八円だった。日本円に兌換して買った鯛が一匹十円であった。故郷行きと病院行きの希望提出があり、衰弱していた体故に東京の国立大蔵病院行きとし、軍用列車のときは逆に上り客車で、沿線の都市の焼野原跡を見て敗戦を実感した。東京から実家と町の叔父あてに、新発田国立病院行きで小千谷駅停車を知らせた。変わりになき小千谷駅、駅員に依頼して背囊を下ろして発車したら、日本通運の倉庫脇に二人が立っていた。父母だ、窓から乗り出して手を振り別れたが、次の汽車で梅干の入ったお握りなどを持って、病室に入り、死亡したと思っていた母と抱き合った。

下痢が止まらないので、富山の配置薬から腹薬と虫下し用のセメン圓など頼んだ。持参してくれた薬を呑んだら、便所に行き水便と共に蚯蚓まじゅういん（蛔虫）が何回も出て、三十匹くらいまでは数えられた。大陸からの

持参品であった。それ以後、目に見えて回復して、昭和二十一年九月、村祭りの十五夜に、無事復員帰郷することができたのである。

我が青春の記録

静岡県 中瀬 高

中瀬広吉の長男として大正八年六月十五日、静岡県富士郡鷹岡村厚原九七九番地に生まれる。家族は父母と十二人の姉弟、私は第二子で、長男は早逝した。

昭和十四年一月十日、現役志願をして、名古屋騎兵第三連隊へ入営した。馬は入隊前から乗っていたので自信はあったが、二月二十日、名古屋市外小幡カ原演習場で乗馬、襲撃訓練中に隣馬に跳ねられ、右足脛骨骨折、二月二十一日より名古屋陸軍病院に入院、六月三日全快したので原隊復帰。よって下士官候補志願は断念した。

昭和十四年八月二十二日、一等兵に進級。

昭和十四年九月一日より留守第三師団歩砲兵無線電信
教習所へ入所。

昭和十五年四月一日、教育終了により原隊復帰、無線、
有線、通信手となる。

昭和十五年九月十二日、支那派遣軍、総司令部に転属
を命ぜられる。

昭和十五年九月十四日、午前零時、中部一三部隊編成
輜重隊の補充兵と合流軍用列車で出発。

翌朝六時、大阪駅で妹よし子の見送りをうけた。列
車は各駅停車で、国防婦人会の見送りを受けながら、
西進輜重隊の補充兵は年すでに三十代半ば、家に妻子
を残してきたのであろう。妻や子と同じ年ごろの姿を
見ると泣いて手を振る。「馬鹿野郎、泣くな、これか
ら戦地へ行くんだ」と叱りつけたが、後に自分が召集
されたとき、その気持ちは理解させられた。

九月十五日、午後二時、広島駅に到着、総司令部に
向かう。騎兵は召集兵の森、岩田上等兵、石川、犬飼
一等兵。二年兵は堀場、丸尾、村松、鈴木、細谷、中
瀬の各一等兵。翌日、昼食後、宇品埠頭集合で、旅館

に一泊、内地最後の広島之夜を満喫した。

十六日午後五時、船名不祥、二千トンの貨物船に馬
五百頭と共に乗船、船倉は二段に仕切られアンペラが
敷いてあり、座ると頭が天井に着くので横になる。関
門海峡通過。

翌朝、玄界灘で台風に遭遇し船は木の葉のようにも
まれる。生きた心地はなし。召集兵が酒を飲めば船酔
いしないと言うので下給品の酒を飲む。体は前後左右
に転がり、酒を飲んだから余計船酔いが激しく、当た
り一面へドの海。飯上げに立てる者もない。便所は船
腹の手すりの外に木造でできている。下を見ると船が
進むので海水は河の急流を思わせる。イルカが追尾し
てくる。揺れるので取っ手を握りしめて用をたす。

九月十八日朝、海水が黄色に変色しているのに気付
く。揚子江の押し出す水流だ。二十日夜半、ウースン
港に停泊、二十一日朝下船、敵前上陸の激しさか、倉
庫は蜂の巣のようであった。

上海駅から汽車に乗る。急行で南京まで六時間、ど
こまでも続く水田で、大陸の広さに驚いた。午後、南

京駅に到着した。支那派遣軍総司令部に到着、衛兵隊に配属される。

昭和十五年九月二十一日から十二月三十一日まで宜昌作戦に総司令部にありて参加。昭和十六年一月一日から七月七日まで昭和十六年前期作戦に総司令部にありて参加。大東亜戦争に参加。

昭和十六年七月一日、陸軍上等兵。交代兵の到着を心待ちにしていた。十四年後期の補充兵は初年兵が来ると喜んでいたのでに召集兵と二年兵でがっかり、帰還も我々が先に帰り、四年間、飯上げ、拭き掃除を続け、誠に不運だったと思う。補充兵だから家に家族を残してきた人が多かった。

昭和十七年八月二十九日、満期除隊のため、第三師団司令部に帰還を命ぜられる。八月三十日、南京を出発、八月三十一日上海港出港。帰還の船は、船名、不祥、六千トンで、敵潜水艦の魚雷を警戒しながら朝鮮南岸を迂回、航海は台風通過のあとで湖上のごとく波は穏やかであった。

九月五日、宇品港に入港した。検疫をすませて、昼

の上に横臥して、日本に帰った実感を味わう。大陸にいては夜半、南京港のドラの音、南京駅の汽笛に故郷を偲び母の安否を気遣うも、父のことは不思議と浮かばなかった。

九月七日、名古屋中部一三部隊に帰還した。九月九日、同隊より満期除隊した。

昭和十九年七月十三日、十九年徴集の徴兵検査の補助員として、吉原小学校勤務中、午後、校庭を見ると親父が自転車で走って来た。召集の赤紙である。親父の自転車に乗ったのを見たのは生まれて初めてだ。感無量。

「七月十三日、中部一三部隊(輜重隊)へ入隊すべし」とある。

妻は長女を連れて実家で病床にあり、今度は南方と覚悟したが、一目妻子に別れを告げたいと思う。電報で知らせるも絶対安静とのこと、再度電報を打つが同じ返電であった。それでも兵士の妻として、帰宅をせがんでいる様子が目に浮かぶ。必ず来るとの確信から翌朝自転車富士駅へ走る。一番二番列車には乗って

いない。

駅員の話では、事によると工員列車に便乗も有り得るとのこと。工員列車は来たが降りてこない。諦めていたところ、最後に父と妹に支えられ改札口を出て来た。子供には一目会えたからよしと、妻を自転車の後に乗せて力一杯自転車を走らせる。家では既に見送りの人たちが待っていた。妻に飯を一膳盛らせて別れを告げる。

長女を抱いて身延線入山瀬駅に向かう。郷里の人たちの万歳の声を後に、一路名古屋屋に向かう。名古屋城の外堀の土手でしばし浮世の涼を取っていたところ、偶然に師団司令部に勤務する宇佐美さんに会う。「君は沿岸防衛隊」と聞き、安堵の胸をなでながら衛門をくぐった。現役のときはいつ死んでもよいと思っていたが、今は未練が残る。

前回の召集兵は「ア号作戦」といい米軍がサイパン島上陸と同時に玉砕した。これにより米軍は飛行場をつくり、日本本土空襲の基地とし、B 29は日本本土を連日爆撃した。他の召集兵はフィリピンとニューギニ

ヤへ行つたが帰還しなかった。

入隊一週間後、第七三師団怒一四九一〇部隊輜重隊が編成され、無線通信手となる。この隊は車両(トラック)一個中隊・挽馬一個中隊編成で、小銃は通信兵のみ与えられた。騎銃から九九式へ、長靴から巻脚絆へと。しかしなかなかうまく巻けなかった。現状の戦況では、もう騎兵は役に立たない、かつての軍の花の騎兵だがこれが転出の姿である。

現在の南山大学へ移動、既に学生は勤労働員で姿はない。十月十五日、現在の岡崎高校へ先発移動し補充兵に通信教育を行う。本部到着に伴い、本部無線通信手となる。中隊は任務に付き転出、通信手は三班に別れ本部各中隊配属となる。早速、地下通信壕を構築、通信は地下壕へ入る。一回目の空襲警報が発令された。命令により、我々は校舎前の桑畑に散開したが小銃は通信兵三銃のみ、時折、岡崎海軍航空隊の飛行場より友軍機は急上昇するが、B 29とはどんな飛行機か分からない。ようやく浜名湖方面より白い煙を引く飛行物体あり、これがB 29と判明、連隊長からあれを撃てと

命令されたが、小銃では有効射程は一キロメートルで一万メートル上空では撃つても無駄だと命令を無視した。これが名古屋の三菱重工への最初の空襲だった。

それから三日置きから二日置きになり連日何百機の空襲で終戦まで一度も外出の許可はなかった。もう内地も外地もない。すべてが戦場である。

初年兵は馬糧のコーリヤンを生で食い、下痢を起こして栄養失調になる。ノミ、シラミの大発生、古兵は煮沸できるからよいが初年兵は、それができないから暇を見てはシラミをつぶしていた。寝具は真冬でも毛布一枚、床に米俵を敷き、戦友の分と合わせ抱き合って寝て寒さをしのいだ。

昭和二十年六月一日、陸軍兵長に進級した。豊橋空襲の翌朝、命令を受け豊橋市外、多米町に宇佐美上等兵を伴い転出、民間の勤労奉仕隊を指揮して自動車壕の構築に当たる。食料が少なく、作業が進展しないので畑のジャガ芋を失敬して隊員に食わせ作業を急がせた。

八月五日、連隊長命令で「敵の上陸間近すぐ帰れ」

の電文を受け帰隊。外泊の許可が出て三泊四日で家に帰り、長女の「父ちゃん万歳」に励まされ帰隊。八月九日、無線電信予備役下士官候補者を命ぜられ、同日候補者隊に入隊。八月十五日、終戦を迎え帰隊。帰隊後ただちに衛兵司令交代の命を受け、交代して司令の任についた。九月二十日、残務整理終了して帰宅した。

【付 記】

昭和十四年一月十日入営の中間は、四月に一期の検閲を済ませ一等兵に進級して中支に向かい、本隊に到着する前に全滅したと聞く。一緒に召集された者のうち、南方に行った者たちは一人として帰った消息はない。

私は幼少より体が弱く長生きはできないとの判断から、どうせ短い命なら国のために死のうと思いい軍隊に志願したが、過酷な訓練、試験にも耐え抜き入隊当時、五五キロの体重が七四キロになり、胸囲は九三センチが一〇三センチとなり、病氣と言えばマラリヤだけが健康になったのは軍隊のお陰だと思ふ。

外地二年、内地三年の九五五年の間、実弾を撃つたのは小幡カ原射撃場で十発、南京の射撃場で十発だけで。

戦争とは互いに殺し合うものなるも、一人も殺すことなく終わったことに悔いはない。

今はただ戦没者の御冥福をひたすら祈るのみである。

中支戦線幾山河

一 鉄道兵の足跡

香川県 平田雅仁

私は昭和十六年一月二十四日、現役兵として鉄道第四連隊第五中隊に入営した。それまでの職歴は次のごとくである。昭和十三年三月三十一日、広島鉄道局高松出張所、松山保線区工事工手としての試傭採用に始まる。一年後技術雇員、広鉄局工務部臨時技術員、広鉄局保線課勤務であったが、昭和十六年一月十五日入営のため休務となった。

一月二十六日、宇品港を出帆、朝鮮羅津上陸。同日

鮮満国境図們通過。二月一日駐屯地牡丹江着、以後同地付近の整備。

十七年六月八日、中支派遣のため牡丹江出發、六月十五日杭州着、七月十九日金華着、作戰参加後、金華野戦病院入院、習志野陸軍病院転院。

十八年三月治愈退院、原隊復帰。

十九年二月鉄道連隊臨時編成、五月独立鉄道第一工務大隊編入。編成完結まで編成業務に従事。駐屯地津田沼出發、五月三十一日博多出帆、釜山上陸、安東通過（鮮満国境）、滿支国境山海関通過し、南京經由武昌着は六月十七日であり、同地に在って次期作戦準備。

七月九日武昌發、二十一日長沙通過、八月株州着、同日より同地に在りて粵漢鉄道開拓準備作業に従事、十八日株州發、九月十二日まで、朱亨付近の戦闘に参加。

以後湘桂作戰、大陸打通鉄道建設、修復、輸送業務に従事したのであるが、終戦。内地復員に至る間、私は中支の山河を、鉄道隊員として転戦した足跡を、断片的ではあるが体験記として記述してみた。

終戦以来、星霜移りて五十年、往時は渺茫びようぼうとして